

教育のフロンティア

NO. 181
2012-2.

NPO法人 北海道自由が丘学園・ともに人間教育をすすめる会
(振込先:郵便局 02790-6-9847 北海道自由が丘学園をつくる会)
〒062-0051 札幌市豊平区月寒東1条15丁目5-11 TEL(011)858-1711 FAX(011)858-1333
URL <http://www12.plala.or.jp/hokjioka/> →変更:www.hokjioka.net E-mail: codmokan@agate.plala.or.jp

定価:250円、年額:3,000円(送料別)
*会費は会費(支援金)を含む



INDEX

- P1: 巻頭言/
- P2: ヒューマンイラスト/
普及活動、会費納入
- p3-5: 「かすかな光へ」
鈴木講演から
- p6-7: スクール実践
教科、表現活動、行事
- p8: スタッフエッセー、
スケジュール、他

《写真説明》2/8アウトドア授業より、滝野自然公園に行き、スノーシュー体験。(ボランティア学生、OBも一緒に)

「かすかな光へ」を上映して(2)

～余市町地域の講演から

NPO法人 相談役 鈴木 秀一

この映画は森康行という監督が作られたものですが、森監督は、「夜間中学」という記録映画を以前に作られた方で、教育の問題に深い関心を寄せておられる方です。大田先生の話によりますと、森監督の奥さんは先生で、また教育研究運動にも努力をされており、監督はよく奥さんと話し合っ

て映画をつくられておるそうで、この映画にも奥さんの力が入っているだろうとの事でした。森監督は、5年間も大田先生について、その行動や生活状況、話や講演を記録されたのだそうですが、金がないので、大宮の駅から大田先生の家に来るのに、タクシーをつかっただけではなく、いつも歩いて来られたそうです。また講演旅行に同行するときも、安い宿に寝泊りするとか、カメラマンも常勤スタッフとする人件費がないので、仕事の空いたカメラマンをその時々をお願いするといった形で、作成した映画だということです。

この映画のおしまいの方に川口市にある知的障害者の収容施設「太陽の家」を大田先生が訪問し、施設のスタッフの方から話を伺う場面がでてきます。この場面も、この施設がとても心温まる奥深い人間尊重の精神で運営されていることを表していますが、この場面を入れようということは、森監督が強く主張されたことだそうで、大田先生は森監督のとてもすぐれた人間的感性から出た発想だったと言っておられました。

(3～5ページに続く)

～大田先生ドキュメンタリー映画～ 『かすかな光へ』上映会、余市町講演より



当日は北星余市高校にて開催。教員・父母・地元住民など参加。事後、余市教育福祉村にて懇親会交流しました。

[2/10 講演草稿の要旨] NPO相談役 鈴木 秀一

(前略) この映画は、教育について、人間について、命ということについて、さらには人の能力、あるいは学力といわれることについて、戦争について、子どもの成長にとっての自然の意義などなど多くのことを考えさせてくれる刺激に満ちた映画です。したがって、ご覧になれる方が、それぞれの関心によって、考えを深めてくださればよいことです。私が考えさせられたことの幾つかを簡単に述べさせていただきます、これからご覧になる場合の参考にさせていただければと思います。
◆大田さんは、現在の世の中が、モノとカネが支配する社会だ、そのなかで人間はバラバラに切り離され、孤独のなかでさまよっている状況だと言っています。そしてこのような社会で、もっとも苦しみを受けているのは、弱者であり、なかでも子どもたち、青年たちではないかと見ています。

この苦しみのなかで、そのはげ口をあるいは非行にもとめ、あるいは校内暴力やいじめに求めたり、そしてまた、不登校といった形でしか対処しえない子どもも多く現れるようになりました。この子どもたちの苦しみを、教師たちが、ともに受け止めようと努力してきた、その早い段階でのあらわれが、北星余市高校の、不登校生・中退生受け入れ宣言でした。子どもたちに寄り添い、子どもたちと心を響かせ合い、苦しみを乗り越える道を子どもとともに探し当てる努力をするのが、親であり、保育者であり、教師であり、教育行政に携わる人たちであり、子どもを取り巻いている大人たちであるべきだ、と大田さんは考えています。そのような考えを確立してくる過程で、大田さんが抱きしめたのが「生活綴り方教育」という実践でした。

★この実践から、大田さんは、第一に、子どもを かけがえのない存在であり、基本的人権を持つ存在であり、その生存のためにたえず学ぶことを通して成長・変化・発展する存在であるという、欧米が数百年かけて作り出してきた近代教育の子ども観、教育観を、生活綴り方教育は現実化して来ていたのだと学んだのです。第二に、この実践は、真に子どもたち、青年たちを自立させていく教育

の原則を示しているということ指摘されています。そして第三に、生活綴り方教育の中で示される、なまなましい告白ともいべき子どもたち、青年たちの事実報告、語りは、本などから得た知識、概念、考え方などで身を装っている学者とか、世間の常識とされている建て前の理屈をふりかざす大人とかの、その知識や観念、理屈など、そんな借り物で権威ぶるのは何にもならないということの思い知らせる働きを持っていたと指摘しています。

◆大田先生は、戦後、戦地から東大に帰られて、教育学部の教官になられたましたが、大学で研究・教育をするかたわら、埼玉県青年学級という戦後、職の無い青年たちに昔の青年学校に代わる学習の場として政府がおこなった青年教育にボランティアとして参加され、この農家の次三男や学校を終えた女子青年で職の無い人たちへの学習支援を行いました。この青年たちが駄弁るために集まる手作りのベンチを青年たちはお金のかからない台だということで、「ロハ台」と名づけていたのですが、集まる場所が寺を会場にして行われるようになったあと、大田先生はこの青年たちのおしゃべりを記録し、ガリ版で印刷し、それを皆で読みあう、そして自分たちのおかれている状況を考え合う、といった活動を行います。

このおしゃべりの記録文集名を「ロハ台」として、発行し、話し合う活動を昭和30年ごろまでやられたようです。これは、大田先生が昭和26年に出版され、ベストセラーとなった山形県山元村の山元中学校生徒の作文集「やまびこ学校」や、それに続いて出された生活綴り方教育の実践記録に学んでやられた青年教育でした。(～中略～)

現在は国語教育では、読むこと、書くこと、聞く・話すことなどと言い、書くことは作文といわれますが、戦前は作文は「綴り方」と言われました。この綴り方の時間には、教科書がなく、子どもたちが自由に文を作る時間でした。明治の頃は、模範文や古文の文体で書かれた手紙文を模写する作文指導が行われましたが、大正時代に入って、